



青森国スポでは激闘の末、堂々の3位入賞。気迫あふれるプレーと手にした賞状で、支えてくれた地元へ最高の恩返しを果たしました

国スポアスリート

小林市出身の国スポアスリートを紹介します！

2026 青森国スポ ビーチバレー競技
(9月3日～6日開催)

都城商業高校女子バレー部

こうのせ
高野瀬 らら さん (3年)

砂上の挑戦。

感謝を胸に全国へ――

「意表を突いた攻撃が決まった瞬間が一番楽しい」。

そう語るのは都城商業高校3年の高野瀬ららさん。

7月、国民スポーツ大会に向けたビーチバレー競技の九州ブロック予選に出場し、3戦全勝。見事、本大会への出場権を獲得した期待のプレーヤーだ。

高野瀬さんは小林小・中学校出身。小学4年でバレーボールを始め、中学時代は持ち前の身長を武器にエースとして活躍した。

「小林中とはとにかく声を出すチーム。自らコートに雰囲気盛り上げた経験が、今の自分の土台に繋がっている」と振り返る。

その後、「絶対に春高に出たい」と親元を離れて強豪校への進学を決意。

「自分で決めたのだから最後までやり遂げてね」という家族の言葉を胸に、厳

しい練習に励んできた。

そんな彼女が指導者の勧めでビーチバレーを始めたのは今年の5月。「最初は砂に足を取られて動きにくく不安だった」と戸惑いもあったが、やがて競技の奥深さに魅了されていく。

「相手のことを常に考えてプレーするのが楽しい」。

自身の武器を「パワー」と力強く語る高野瀬さんだが、見出したビーチの魅力は意外にも、「力や体格だけで決まらないところ」。

6人チームのインドアとは異なり、ビーチは8対4の方のコートをたった2人でカバーする。だからこそ、風や相手の体格などの要素を考慮し、次の動きを予測する心理戦が鍵を握る。

「スペースが空いているか」、「どんなパスが欲しいか」など、試合中もチームで意思疎通を図っている。

「ビーチバレーを経験したこと、これまで以上に相手のことをもっと考えてプレーするようになった」。

砂の上で培った、観察眼や味方との緻密な連携は、インドアのコートでも彼女のプレーを一段高いレベルへと引き上げている。

着実に進化を遂げる彼女だが、決して現状に満足しているわけではない。8月に行われたビーチバレーの高校生全国大会「マドンナカップ」で惜しくも準優勝に終わり、あと一步で頂点を逃した悔しさが、闘争心に火をつけているのだ。

「今度(国スポ)こそ絶対に1位を取って、いい報告ができるようにしたい」。競技を続ける上で大切にしているのは周囲への感謝の心だと話す高野瀬さん。

国スポ本戦出場を一番喜んでくれた家族や地元へ最高の恩返しをするため、感謝の思いと勝利への渴望を力に変え、若きアスリートは大舞台での雪辱を誓う。